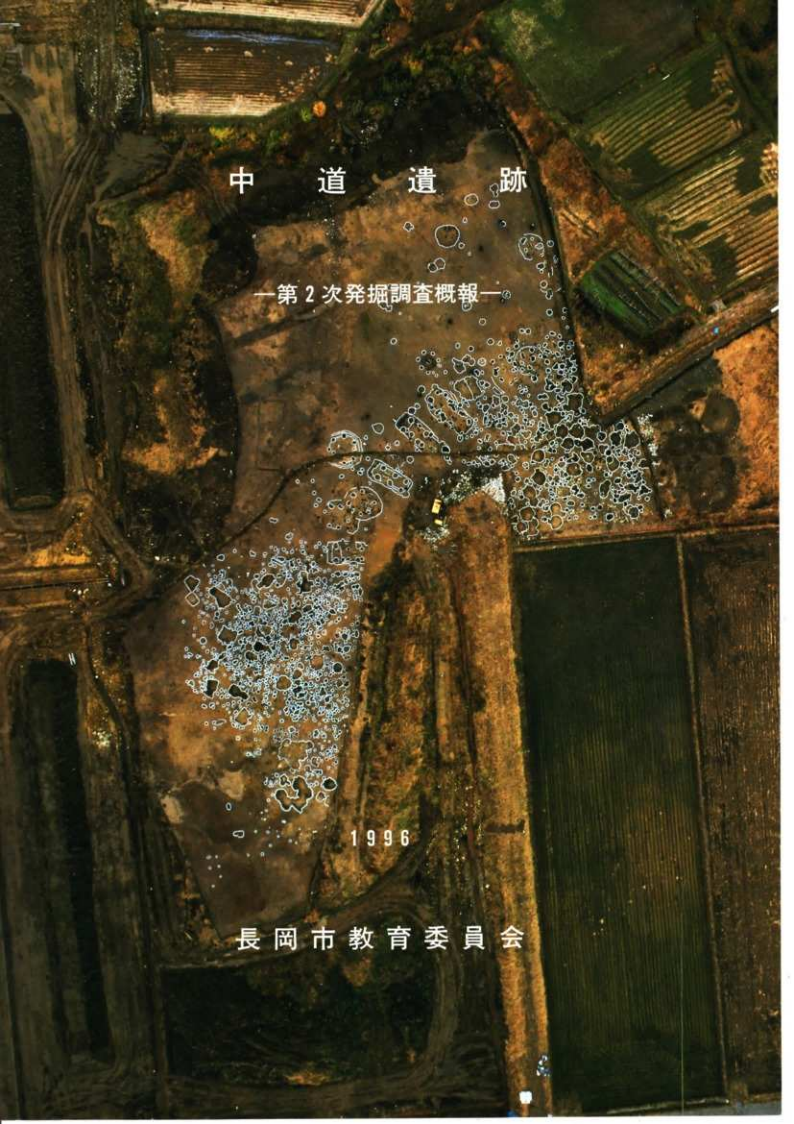


中　道　遺　跡

―第２次発掘調査概報―

1996

長岡市教育委員会

第２次発掘調査

耕作土除去作業

発掘スナップ

発掘説明会

平成７年４月25日、バックフォー等で30～70cmほど堆積している無遺物層の水田耕作土を除去することから第２次発掘調査を開始した。５月初めまでに調査用排水路の掘り込み、現場事務所の設置、発掘調査用基本杭の打設、ベルトコンベアー等の搬入などの準備作業を終え、５月15日に作業員を動員して発掘調査を始める。

発掘は、第１次調査で確認した西側の拡張部分から始め、順次西から北、そして東側へ広げながら進めて行った。第２次調査で、注目されたのは、中世の地下式横穴などの遺構群と、縄文時代中期の炭化材が壁際で出土した第20号住居跡であった。また、調査の最終盤ではトチノミが床面で多数出土した第51号住居跡が発見され、第２次調査を通じて最も貴重な資料となった。トチノミ遺構をはじめとする数々の成果が上がっていたため、11月19日に市民を対象に、遺跡発掘説明会を開いた。その後12月に入っても、測量図面の確認等の調査が続き、最終的に整理室に引き上げたのは12月８日であった。その間、第１次調査とは異なり、雨天の日が多く、天候に随分と悩まされた。第１次調査は、調査期間141日（休日を含む）に対し、調査を行った日は78日の約55.3%、第２次調査は211日のうち、93.5日の約44.3%と11%も調査日数率が落ちている。特に７月は休日を除いた21日のうち調査ができたのは10日間であった。

中道遺跡周辺の航空写真

中道の縄文時代

第２次調査で発見された縄文時代の遺構には、竪穴住居跡31軒、掘立柱建物１棟、フラスコ状ピット28基などがある。竪穴住居跡は、縄文中期が大半で、火災の痕跡を示す住居跡が、３軒並んで発見された。その中の１軒（第51号住居跡）の床面からトチノミが大量に出土した。また、明確に後期の竪穴住居跡と判断され

るのは、第37号住居跡の１軒だけで、晩期の竪穴住居跡は発見されなかった。

第20号住居跡

縄文時代中期の住居跡

第20号住居跡（第２図）　第１次調査で南東側の半分が検出されていた方形の竪穴住居跡で、炭化材が壁際に並んで発見された。主柱穴は６本で、周溝が柱穴をかすめるように巡っていた。炉跡は、中央からやや西側に寄って長方形の石組炉があり、中から獣骨の破片が出土した。また、石組炉の軸線に沿って焼土が広がっていた。北側の隅には直立した土器の底部や石皿があり、その付近から炭化したトチノミが数点出土した。炭と灰が混じった土層（炭灰層）が床面全体を覆っていた。

第20号住居跡の炭化材

壁際の炭化材は、北東と南西の２辺の壁際と北側の隅に見られた。北東の壁際の炭化材は、２列に並び、壁側の炭化材は小口を上にした板状の状態で位置していた。炭化材の下には、細い溝が確認され、壁側の炭化材が板壁であった可能性が指摘できる。南西の壁際の炭化材は１列で板状に立っていた。これも板壁の可能性がある。一方、内側の炭化材は床に横たわっていた。柱の上に架かっていた桁が焼け落ちたものであろうか。北側の隅にある炭化材は、中が刳り貫かれた状態でこれも立つように置かれていた。下には穴があり、桶のような容器の焼け残りであろうか。壁側や隅の炭化材の下が溝若しくはピット状になっていることは、土の中に埋まっている住居用木材が火災に遭っても燃え残り、その後腐食して土に帰ったことも考えられる。北側の炭化材が桶であれば、近くにある石皿、直立した土器の底部、それにトチノミや獣骨の存在などと併せて考えたとき、水屋の施設が置かれた場所と思われる。住居の床面からは大木９式土器が出土しており、第20号住居跡は縄文中期後葉の大木９式期の住居跡と考えられる。

第45・46号住居跡

第51号住居跡　床面が地山直上にある方形の竪穴住居跡で、北に面する妻側にトチノミが多数出土した。この第51号住居跡は、第47号・第48号・第50号住居跡の３軒と重なっていた。第48号住居跡は南側のＡ字形の石組炉（＝複式炉）、第47号住居跡は第48号住居跡の炉跡の頂部

火災に遭った住居跡群

に近い東側から北側に、複式炉の足の部分と思われる一辺が残っているもの、第50号住居跡は第48号住居跡の石組炉から北に広がる地床炉の焼土面をもってそれぞれ住居跡としたものである。この3軒の住居跡は地山を掘り込んだ竪穴住居である。

第51号住居跡の床は、第48～50号住居跡の土層断面から床を張っていたと思われる。推定した柱穴の位置から、桁行2間、梁間1間の方形の住居跡と見られる。周溝が北辺と東西辺にあり、南辺の周溝は東の周溝が曲がっていることから、第48号住居跡の複式炉のほぼ中央を通っていたものと思われる。周溝に囲まれた面積は、20.4㎡（桁行約7.3m×梁間約2.8m）と推定される。

トチノミは、北の妻側にある2本の柱に挟まれた床面に、妻側がほぼ一直線に並び、中ほどが盛り上がった状態で密集して出土した。2～3粒ほどは密集エリアからはみ出ていたが、飛び散った状態ではなかった。山盛りになったトチノミの表面に見える数は、おそらく500粒を越えるものと思われる。トチノミの下には、茅のような細い棒が束になって入っていた。その付近には横たわった炭化材や床面が真っ赤に焼けた箇所が見られた。また、トチノミを挟んでいる2本の柱は、立ったまま焼けて炭化した状態である。特に西側の柱の付近には炭化材が多く残っていた。燃え残った柱や横たわった炭化材、床面が焼けていることなどから、第51号住居跡は西隣の第20号住居跡と同じく火災に遭った住居と判断される。床面から大木9式土器の破片が出土している。

トチノミやドングリなど、縄文時代前期後半以降の縄文人の主食になったと考えられている堅果類は、土中に掘られたフラスコ状ピットなどに蓄えられているケースが多い。中道第51号住居跡のトチノミ及びその周辺の状況から、トチノミの屋内における保存の方法の一つとして、次のようなことが考えられる。第20号住居跡の炭化材の状況から、板壁が縄文中期まで溯って存在することが推察できた。そのことと、トチノミがほぼ一直線に並んでいることは、板壁に沿って整然としていたものと思われる。トチノミが飛び散らずにいたことと、茅の棒が束になっていたことは、篭の存在が考えられる。また、トチノミの密集していた範囲の面積が約1.5㎡（190㎝×78㎝）で、住居跡の推定面積の7％以上を占め、ある意味では畳1枚分に近い大きな面積と思われ、床に直に篭を置くとそれだけ生活する空間が少なくなる。これらを総合的に考えると、トチノミは、棚の上に篭の中に入って保存されていたが、火災に遭って板壁に沿って飛び散らずに燃え落ちたものと思われる。そして、完全に燃えなくて炭化したトチノミや茅の棒、それに柱などの建築部材が発掘で出土したと考えられる。なお、床面に残されたトチノミは燃え残りであり、500粒を越えると思われるトチノミから縄文時代中期後葉における一世帯でのトチノミの消費

第51号住居跡内のトチノミ

トチノミの部分拡大(茅の棒が見える)

量や貯蔵量を推量することは、難しいと思われる。

トチノミが密集していた周辺から、ドングリが2～3粒出土したが、トチノミの出土量とは比較にはならないほどである。第20号住居跡の水屋と推定した部分からもトチノミが数粒出土しているが、トチノミ以外の堅果類は、一粒も出土しなかった。これは、当時の縄文人がドングリよりも灰汁抜きなどに手間がかかるトチノミを好んでいたのは、一粒の大きさがドングリなどよりも勝っているからであろうか。

その他の住居跡　なお、第51号住居跡の東にある方形プランの第45号・第46号住居跡は、炭化材が床面を覆っており、火災に遭った住居跡と思われる。この住居跡からも大木9式土器が出土し、第20号住居跡から東にかけて並んだ3件の住居がいずれも大木9式期の住居であり、同時に火災に遭ったことも考えられる。この大木9式期の第45号・第46号・第47号・第48号住居跡の炉は、いずれも複式炉で、第45号・第48号の炉の床には土器の破片（第45号）や、石（第48号）を敷いている。また、第34号住居跡は、大木9式期の円形の竪穴住居であるが、炉は床に土器が敷かれた複式炉である。大木9式期の竪穴住居跡でも、平面の形態に円形（第34号）、方形（第20号・第45号・第48号）の別があり、炉も第34号住居跡などの複式炉のほかに、第20号住居跡の長方形石組炉がある。

飾られた石組炉　第1次調査では、第1号住居跡や第16号住居跡の長方形の石組炉に、飾られた土器の把手の破片が使用されていた。第2次調査でも、第52号住居跡の石組炉に土器の破片が組み込まれていた。第1号住居跡の石組炉は、大木8b式土器の飾られた把手が2点、炉の石と石との間に挟まれたり、立て掛けられたりしていたし、第16号住居跡は1点の土器の破片が石組炉に石と同じように組まれていた。第16号住居跡も大木8b式の住居跡である。第52号住居跡の場合は、平らな口縁の土器破片や渦巻降起文などの破片が、長方形の石組炉に組み込まれていた。組み込まれた土器の破片は、第1号・第16号住居跡と同じく大木8b式である。

また、第26号住居跡の長方形の石組炉には大木8b式の飾られた台付鉢が埋甕として使われていた。第1次調査の第16号住居跡などと同じである。これも炉を飾る行為と同じ目的をもっているのであろうか。

なお、大木8b式の時期の「飾られた石組炉」は、80数軒の住居跡を調査した信濃川を挟んで対峙する岩野原遺跡（駒形敏朗・寺崎裕助「埋蔵文化財調査報告書－岩野原遺跡－」長岡市教育委員会　1981年）では見られなかったことで、長岡市内では今のところ中道独特の流儀である。

縄文時代後期の竪穴住居跡　第1次調査では、掘立柱建物跡の第1号建物跡と、黒色土の中に後期と思われる炉を数基発掘した。第2次調査では、掘立柱建物跡の第2号建物跡と、竪穴住居跡の第37号住居跡などを調査した。第37号住居

第34号住居跡の複式炉

第26号住居跡

第26号住居跡の飾られた埋甕

第１号住居跡の飾られた石組炉

第52号住居跡の飾られた石組炉

跡は、遺跡の北側にある沢に近いところに位置していた円形の竪穴住居跡である。覆土から、刺突文が施された蓋が出土しており、後期初めの三十稲場式期の住居跡である。柱穴は、壁際をぐるりと巡る小さなピットで、いわゆる壁柱穴と思われる。炉は、石組炉ではなく、住居の中央部からやや北側にある床を掘り窪めた地床炉である。この第37号住居跡が、中道における縄文後期の明確な竪穴住居跡である。

主な出土品　縄文時代の遺物としては、火焔型土器・王冠型土器などの縄文土器、石鏃・石錘・石皿・磨石・凹石・打製石斧・磨製石斧などの石器類、首飾の玉・土製耳飾などの装飾品、それに土偶・石棒などの呪術的な道具が多数出土した。

縄文土器は、中期の大木8b式から大木９式に併行する土器が主体的で、後期と晩期の土器も出土している。それらの中には、土器に人の顔を付けた人面付土器、注口土器と底に多数の穴がある多孔底土器とが一体化した「多孔底付注口土器」、壺や注口土器などの小形土器などが注目される。

人面付土器は、鉢形土器の胴部に顔が、立体的に横向きに付けられている。顔の後頭部に剥落した痕跡が見られ、もう一面の顔が対になって付けられていた可能性がある。人面付土器は、顔を縦に付けるものが多く見られるが、横向きの顔は今のところ類例は認められない。中道の人面付土器は、口縁部や胴部の文様から中期の大木8a式期の土器である。

縄文後期には、底部に多数の孔がある「多孔底土器」が多く作られるが、注口土器と一体化した土器は、岩代袋原遺跡の１例（関雅之「多孔底土器に関する試論－伴出時期と用途を中心として－」『越佐研究』第二十七集　1968年から孫引き）を知るだけである。中道の多孔底付注口土器は、注口土器の注口部の内面上部に多孔底が甑の簀の子のようになっているものである。外面は無文であるが、底部には細かい網代の痕跡が見られ、後期中葉の三仏生式と考えられる。

縄文後期の第37号住居跡

小形土器は、蓋・壺・注口土器の３点が出土している。これらは、通常の土器と比べて極端に小さく、３個一緒に手のひらに乗るほどの大きさで、祭祀用の土器かと思われる。蓋は、太いつまみと、つまみの付け根を挟んで２個づつの張り瘤がある。壺は底部がやや尖りぎみで、不安定な作りである。注口土器は、やや偏平な胴部から口縁がほぼ垂直に立ち上がり、上部に注口が付いている。いずれも無文土器であるが、形態からみて晩期の大洞C1式期の土器であろう。なお、蓋は後期初めの三十稲場式土器に特有な製品で、晩期に

まで続かない。このため、中道の蓋は、底面に文様が描かれていないが、後期になって出現するスタンプ状土製品の可能性もある。

縄文時代の祭祀に関する代表的な道具に、土偶がある。中道では縄文中期と後期の土偶が多く、晩期のものは、第1次・第2次調査を通じて出土していない。第2次調査で出土した中期の土偶は11点で、体部が板状で、脚部を省略する河童形土偶の一群である。後期の土偶は、山形土偶に分類されるもので、9点出土している。土偶は、完全な形で出土することはまれで、中道の場合も全て欠損している。VF－P31出土の山形土偶は、頭と両腕を欠き、胸、腹部から右足、それに左足がバラバラに割れて出土した。

縄文中期の石棒

石棒も祭祀に関する道具で、第1次・第2次調査を合わせて43点出土している。そのうち、中期の大形品が大半を占めている。石棒の出土位置は、住居の床に置かれたものはなく、フラスコ状ピットなどの遺構の覆土に廃棄された状態や、包含層からの出土であった。

縄文晩期の石冠

第1次調査で2点出土したヒスイの大珠は、第2次調査では1点もなかった。大珠に変わって第2次調査では、垂玉などの玉類が4点、後期・晩期の土器が出土している地域から出土した。ヒスイの玉類も3点ある。それにヒスイの原石が1点、剥片が数点、それに玉を磨いたと思われる筋の入った砥石が2点出土している。このことから、中道でも後期の三十稲場遺跡や、晩期の藤橋遺跡同様に、集落内で首飾りの玉を生産していたと考えられる。剥片の中には、玉を穿孔する際の痕跡が見られるものが1点ある。これからも、中道が玉造りの村であったことを物語っている。なお、ヒスイの原石は、玉に加工する剥片を剥離した後のもので、一部に敲打痕が見られる。

縄文後・晩期の首飾りの玉

壊れた縄文後期の土偶（VF－P31）

中道の中世

第１次調査では、地下式横穴や井戸、それに道跡などの縁石らしい遺構と、中世陶磁器や木製の皿などを発掘した。第２次調査では、Ⅰ・ⅡC・Dにかけて、地下式横穴９基、土壙（墓？）42基、井戸１本、それに掘立柱穴跡が多数検出された。第１次調査分と合わせると、地下式横穴は12基になり、しかも環状に位置していた。地下式横穴の周辺には土壙があり、中央には井戸が、そして地下式横穴に囲まれた中に掘立柱穴跡が多数あった。掘立柱穴跡から建物跡を推定する作業を進めているが、土壙などの遺構が重複しており、今のところ１棟も推定するまでには至っていない。

主な遺構

地下式横穴　地下式横穴は、地下にトンネル状の横穴を掘った遺構で、遺体を安置する墓、あるいは物資を蓄える地下倉などの機能が考えられている。中道の地下式横穴の形態は、第９号のように横穴へ降りる入り口部分が細い階段状で、階段を降りると方形に広がっている。規模は、小形のものから大形のものまであるが、一般には小形のものは少ない。地下式横穴の検出は、地山上面での掘り形が不整形である

中世遺構群

ことなどから、地山面での遺構確認作業では困難であった。その後、土層断面の観察から覆土の上部が黒色土と黄褐色土などの地山土とが入り混じったマーブル状を呈していることが多いと判断され、それによって第９号地下式横穴を確認した。

第９号地下式横穴の確認は、不整形であるが細長くてマーブル状に黒色土と地山土とが混ざった土壌で地下式横穴と判断した。そして、長軸と短軸で土層を観察することにして発掘を進め、地下式横穴であることを確認した。地下式横穴には土器などの遺物を伴うものは少ないとも言われている。中道で遺物が出土した地下式横穴は、珠洲焼の大甕と壺が入り口付近で出土した第６号地下式横穴、珠洲焼の壺の底部破片が出土した第７号地下式横穴、それに第９号地下式横穴の底面に差し込み式の鍬の刃先（鉄製）の３基だけであった。第９号の鍬以外は、入り口付近からの出土で、地下式横穴が陥没した後に投棄された可能性がある。第６号で壺が発見された直後は、摺鉢の底部を被せた骨壺などの施設かと思ったが、発掘を進めるうちに、大甕の破片が地下式横穴の覆土から数多く出土し、最後には大甕に復元され、投棄された可能性が高いと判断するに至ったものである。また、第６号地下式横穴の底面付近からは、米のモミガラが十数粒出土している。地下式横穴の機能に墓という意見があるが、残念ながら中道の地下式横穴からは骨は出土しなかった。それに引き換え、第６号からモミガラが出土したことから、地下倉説を勇気づけることになったが、あまりにも湿気が多いことなどから、今のところ地下倉説にも賛同できないでいる。地下式横穴の性格については、中道が栖吉城跡など中世の遺跡が多い栖吉地区の一角に位置することも含め、歴史的な流れを考慮しながら検討すべきであり、今後の課題としたい。

なお、地下式横穴の上部の覆土がマーブル状になっていることは、地下式横穴を掘る際に天井を残してトンネルで掘ることの他に、天井から地下式横穴を掘り、最後に掘り出した土砂（表土の黒色土と地山土）で天井部を覆ったことも、地下式横穴を構築する方法の一つとして考えられる。

土壙（墓？）　地下式横穴の周辺に囲まれた中に位置する土壙は、平面が不整形で浅いものと、やや深くて方形プランなどがある。やや深くて方形の土壙（第29号・

第９号地下式横穴の確認

第９号地下式横穴

第６号地下式横穴の大甕・壺

第７号地下式横穴

第40号土壙など）は、三貫梨墳墓（駒形敏朗・他「三貫梨遺跡－第１次発掘調査－」長岡市教育委員会　1986年）の人骨が出土した土壙に類似し、墓の可能性が極めて高い。浅くて不整形な土壙の第16号土壙からは、唐の開元通寶（初鋳年621年）、北宋の天聖元寶（初鋳年1023年）、熙寧元寶（初鋳年1068年）２枚、元豊通寶（初鋳年1078年）、政和通寶（初鋳年1111年）の６枚がまとまって出土した。これは、黄泉の国へ旅立つ死者に副葬する六道銭の風習を示すと思われ、これも土壙墓の可能性が指摘できる。

第16号土壙

第16号土壙の六道銭

第29号土壙

第３号井戸跡の木椀

第41号土壙の炭化材

地下式横穴の外周に、炭化材が多数横たわっていた土壙（第41号土壙）が位置していた。形態は方形で浅く、南辺の中央に柱穴が１本あった。炭化材の中に炭化した一握りほどの米粒が混ざっていた。墓と思われる方形の土壙と平面の形態は同じであるが、掘り込みが浅いことや、炭化した米が混ざっていたことから、土壙墓とは考えにくい。むしろ、重なり合う状態で焼け残って炭化した木材が多いこと、米のモミガラが混じっていたことから、倉の可能性も考えられる。今後に検討する課題である。

また、地下式横穴や土壙（墓？）に囲まれた中に柱穴が多数あり、今のところ建物跡は推定できないが、複数の建物が存在したと思われる。そして、地下式横穴群の中でも建物が存在した近くにある第７号地下式横穴のすぐ脇に、鶴が描かれた木製の漆椀が出土した井戸が１本あった。この建物や井戸も含めて、中世の遺構群が集中している区域の性格を検討していきたい。

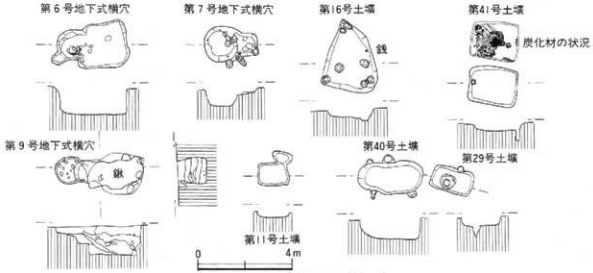
主な出土品　第２次調査で出土した中世の遺物は、青磁（四耳壺・椀）・白磁・染付・天目の舶載陶磁器、瀬戸焼・越前焼・珠洲焼・かわらけ・瓦質土器などの国産陶磁器、鉄製の鍬の刃先、渡来銭、木椀などがある。第３号井戸跡は、黒の地に朱漆で鶴が描かれた木椀が底面近くで出土したほか、珠洲焼などの陶磁器、それに焼けて炭化した建築部材などが出土している。出土量は概して多くない。

珠洲焼は、甕・壺・摺鉢の３器種があり、第６号地下式横穴出土の大甕と壺の２点が復元できた。14世紀末から15世紀初めごろの製品である。その他の中世陶磁器類も15世紀を中心に、14世紀から15世紀代のものが多く、16世紀のものも出土している。これから、中世の中道は、15世紀代を中心に、14世紀から16世紀まで続いた遺跡と考えられる。その性格は不明であるが。

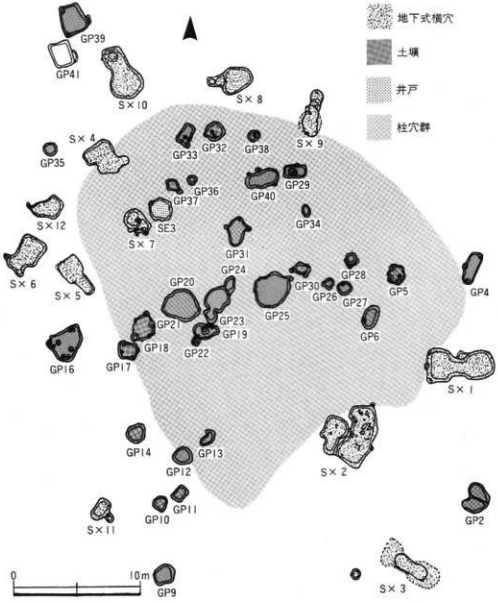
なお、第１次調査概報で、「木の小槌」とした遺物は、検討したところ、中世の絵巻に登場する「毬杖（ぎっちょ）」の可能性が高いことが分かった。毬杖は、木製の球（毬）と毬を打つ杖（毬杖）とでセットになって、正月行事などに使う道具である。広島県草戸千軒遺跡などから出土している。

第１図　中道遺跡周辺の地形図及び中世遺跡群（1/15000）

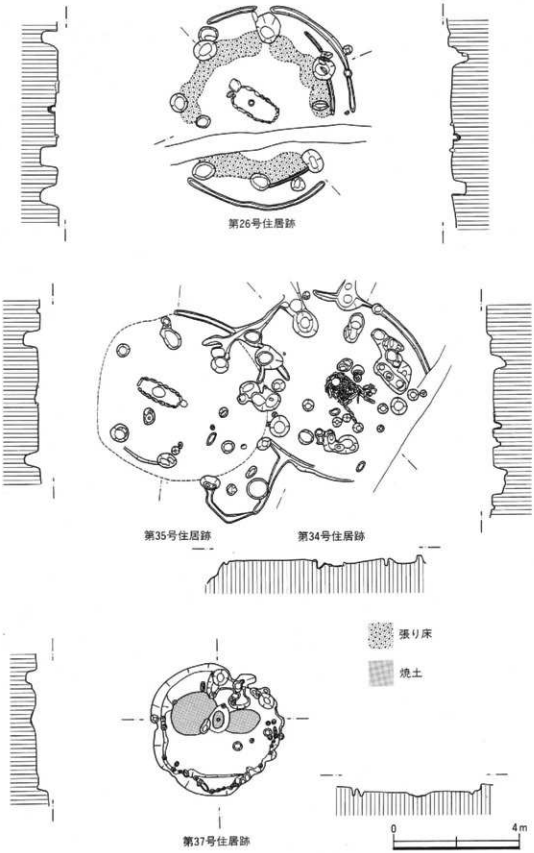
第２図　第１次・第２次発掘調査の遺構全体図（1/1000）



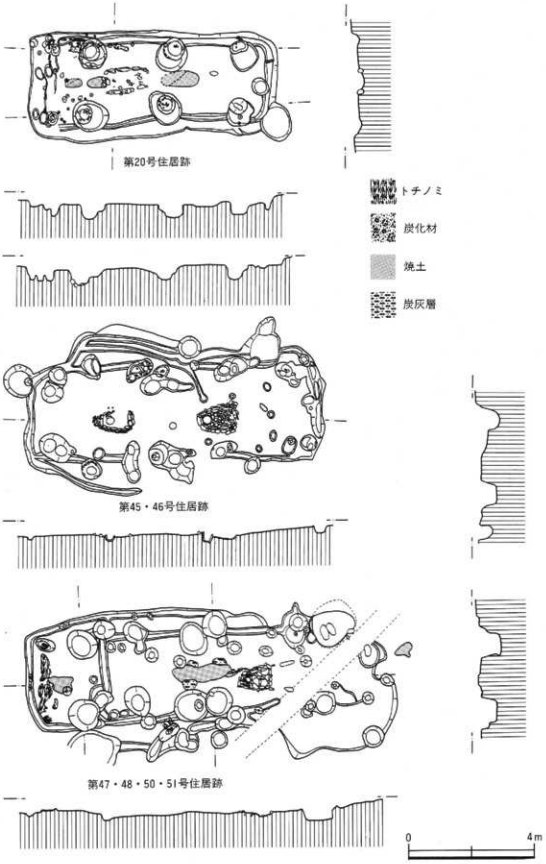
第3図　中世の遺構実測図（1/160）



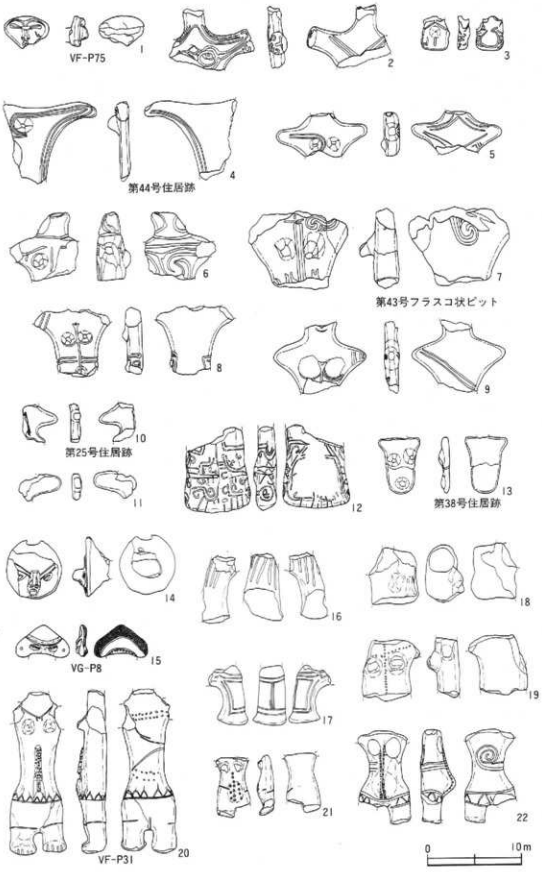
第4図　中世遺構群（1/300）



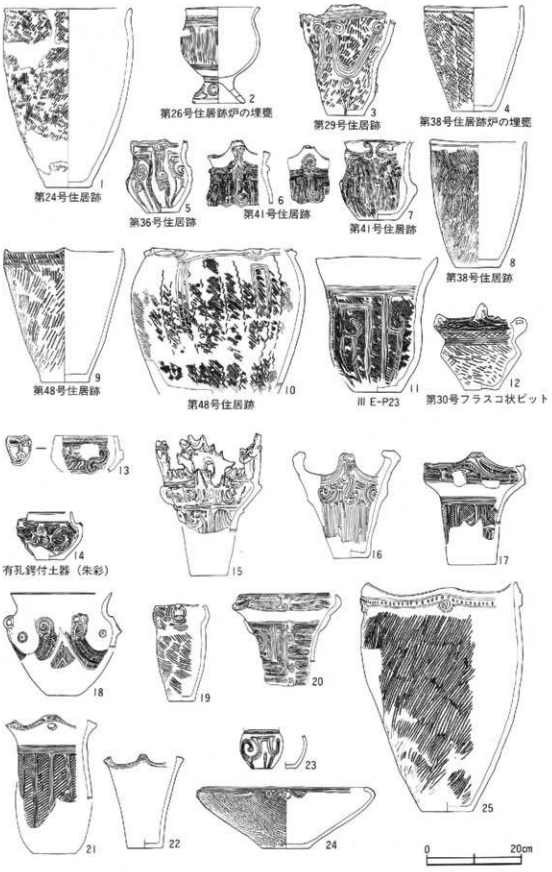
第5図　縄文時代の竪穴住居跡実測図（1/120）



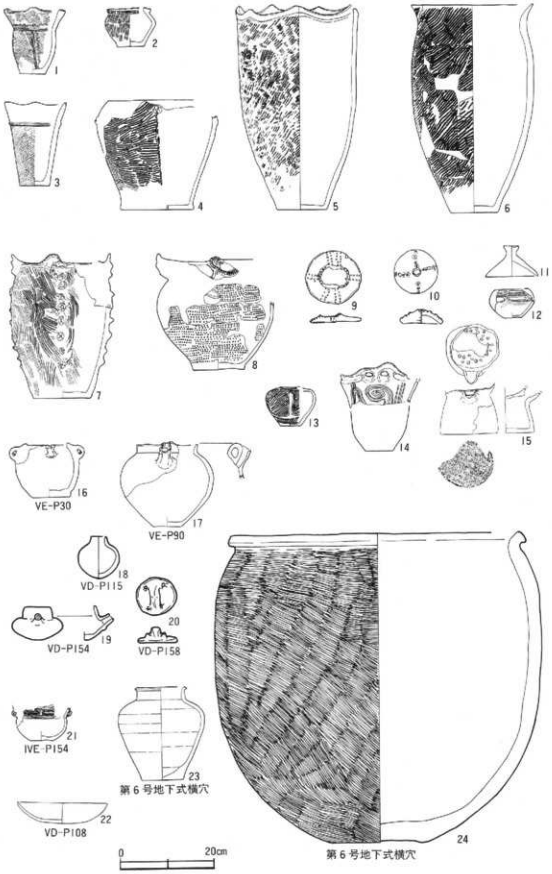
第6図　縄文時代の竪穴住居跡実測図（1/120）



第7図　土偶（1/4）
特に指示していない土偶は、包含層出土



第8図　縄文土器（1/8）
特に指示していない土器は、包含層出土土器



第9図　縄文土器（1/8、18～20は1/4）・珠洲焼（1/8）
特に指示していない土器は、包含層出土土器

報告書抄録

ふりがな	なかみちいせき
書名	中道遺跡
副書名	第2次発掘調査概報
巻次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	駒形敏朗
調査機関	長岡市教育委員会
編集機関	長岡市教育委員会
所在地	新潟県長岡市幸町2丁目1番1号
発行年月日	西暦1996年3月28日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
中道遺跡	新潟県長岡市 栖吉町字中道	15202	5	37°25′ 10″	138°53′ 32″	19950425 ～1208	5900	圃場整備

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中道遺跡	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡 31 掘立柱建物跡1 フラスコ状ピット28	縄文土器コンテナ 440箱 土偶21 玉類5 石鏃140 石匙5 石錘110 石皿80 凹石520 磨製石斧160 打製石斧170	
		中世	地下式横穴 9 土壙42 井戸1	珠洲焼700 陶磁器140	